

『清平調詞三首』 李白

念願かなった朝廷への出仕

李白が都長安で過ごした歳月は意外に短い。六十二年の生涯のうち二年足らず。作品を漫然と読んでみると、随分長い間長安に居たように思いがちだが、年譜上は天宝元年の秋から同三年三月までの足掛け三年ながら、実質は二年足らずの極めて短い間のことで、四十二歳の秋から四十四歳の晩春までの、ほぼ十九箇月に過ぎず、六十二年の生涯の中では決して長い期間とは言えない。宮廷での役職は翰林供奉^{かんりんぐぶ}。これは李白が抱負とする国政に参画できるものでなく、皇帝の詔の草案作りや宴遊のときなどの即興詩を作ることなど李白のために臨時に設けられた仮の役職だった。

十代の後半、任侠の世界にはまりこんで人をあやめたこともあったが、二十歳の頃、或る隠者にしたがって隠棲の真似ごとをしたのを手始めに、成都に出て峨眉山に遊び、

しばらく落ち着きの無い年月を過ごした後、二十七歳で結婚し、湖北省安陸に安住した。が、八年後そこを去って、以来、漂白流浪^{へうろう}の人というべき生涯に終始する。長安滞在中もそんな生涯の中の短い「ひととき」でしかなかった。いわば飲んだくれの破天荒^{はてんかう}な五百数十日だった。並みの酒飲みではない。江戸の川柳に「李太白一合ずつに詩を作り」「四日めに空き樽を売る李太白」「李太白返り字のあるくだを巻き」「長安の酒屋李白に倒される」というあたりがほぼ日常で、深酒、二日酔いの明け暮れだった。

酔態の中で即興に生まれた名作

杜甫が「飲中八仙歌」の中で八人名士をとりあげている。中でも李白については「李白は一斗詩百篇。長安市上酒家に眠る。天子呼び来たれども船に上らず、自ら称す臣は是れ酒中の仙」と詠んでいる。杜甫がこの作を何年に作ったかはよくわかっていない。が作中に詠われている李白の姿は、天宝二年のそれであった。泥酔の果てに、天子の前で高力士^{かうりき}に靴を脱ぐのを手伝わせ、その恨みを買うことになったのも、此の年のことだった。やがてこのことが、李白の運命に大きな係わりを持つことになる。そんな短かった長安時代の作に「清平調詞三首」といわれている七言絶句の連作がある。楊貴妃の艶やかさを詠って余すところの無い即興三首。この名作が作ら

れることになった経緯が、唐の李潜（りしん）という人の筆になる「松窗録」という書物に詳しく書き記されているようであるが、諸解説書によると開元年間のこと、玄宗皇帝が紅と紫と浅紅（せんこう）と純白との四色、四本の牡丹が咲き乱れる沈香亭（ちんこうてい）において花見の宴が開かれることとなった。これには玄宗は馬で楊貴妃は歩輦（ほれん）（てぐるま）での行幸であった。この時李龜年（りきゅうねん）という宮廷歌手が楽団を引き連れて進み出て、皇帝の前で将に歌を始めようとした時、玄宗がそれを遮り「名花と后とが相對してここに居るというのに、どうして昔ながらの古くさい歌などを使うことがあるのか。」と言うと下臣

によって皇帝の前に召し出された李白に「新しい詩を作れ」と命じた。このとき、李白は例によって二日酔いが醒めずに苦しんでいたが、筆をとると忽ちのうちに作り上げたのが今なお中国の民衆に親しまれる傑作となった「清平調詞」三首である。李龜年がこの歌を捧げると皇帝は梨園（宮中の音楽教習所）の楽手たちに



長安にて 〈飲中八仙歌〉の中の李白（唐詩選画本）

命じて管弦を奏（かな）でさせ、龜年に歌わせた。楊貴妃は酒を含みながらこれを聞いて、大いに喜び、皇帝は自ら玉笛を吹いて曲に合わせ、楽曲の一章の変り目ごとに曲のテンポを緩（ゆる）めて、余韻を楽しんだ。そういうことがあってから皇帝は李白に特別の目を向けるようになった。云々。

清平調詞 其の一

雲想衣裳花想容 雲には衣裳を想い花には容を想う
春風拂檻露華濃 春風檻を拂うて露華濃やかなり
若非羣玉山頭見 若し羣玉山頭に見るに非ずんば
會向瑤臺月下逢 會ず瑤臺月下に向かつて逢わん

雲を目にすれば
その衣装を思い浮かべ、花を目にすればその容姿が思い浮かぶ。春風が手すりを払うように吹き過ぎ、露はしっとり美しい。楊貴妃のような美しい人には、あの西王母が住むとい



〈清平調詞〉（唐詩選画本）

う群玉山の頂か、美しい仙女たちが住むという瑤臺（五色の玉で造った高台）に於いてしか逢えないだろう。

これは一種の褒め歌に過ぎないが、当時の宮廷詩人の役目としてやむを得ない仕事だった。それにしても起句の発想がいかに李白らしい。普通ならば「衣裳を見て雲の美しさにたとえ、容姿を目にして花にたとえる」ところを逆に描出している。あとは漢詩独特の、伝説引用による幻想的耽美の世界。

清平調詞 其の二

一枝濃艶露凝香 一枝の濃艶露香を凝らす

雲雨巫山枉斷腸 雲雨巫山枉げて斷腸

借問漢宮誰得似 借問す漢宮誰か似るを得ん

可憐飛燕倚新粧 可憐の飛燕新粧に倚る

一枝の紅く艶やかな牡丹の花に露がしつとりとおりて香を凝らしている。昔、楚王が女神と情を交わしたという巫山の夢の話が断腸の思いをつのらせるばかり。ちよいと尋ねたいが、漢の宮殿の中で誰が楊貴妃に最も似ているだろうか。化粧したての美しさを誇るかのようなあの趙飛燕しかいなかったのではなからうか。

伝説に加えて故事の引用も、漢詩の伝統的技法のひとつ。引用された趙飛燕は、前漢の絶世の美女。しかし、この作

品がまもなく、李白に大きな災いをもたらすことになる。

清平調詞 其の三

名花傾國兩相歡 名花傾國兩つながら相歡ぶ

常得君王帶笑看 常に君王の笑いを帯びて看るを得たり

解釋春風無限恨 解釋す春風無限の恨み

沈香亭北倚闌干 沈香亭北闌干に倚る

名花牡丹と絶世の美女とが、互いに喜びあっている。天子はにこにここと御機嫌うるわしくそれを眺めておいでになる。そんなご寵愛のせいで、楊貴妃は春風の愁いからも解きほぐされ、おだやかな心で沈香亭の北の闌干によりかかっていらつしやる。

気概がみなぎる自由人・李白

李白が長安から追放された経緯については「松窗録」にある記述を、もろもろの解説書が引用している。それによれば、李白がこの三首を作ったとき酔いに任せて宮中で宦官（去勢されて宮中の奥向きに仕える男）の高力士に靴を脱ぐを手伝わせたことがあった。高力士は、そのことに深い屈辱と恨みを抱いていたので、その復讐のために、李白のこの清平調詞三首の、特に其の二について楊貴妃に讒言した。



西安市興慶公園にある沈香亭

と尋ねた。高力士が答えた「お后様をあの下衆な女げすなの趙飛燕になぞらえて、お后様を嘲笑あざわらているのですよ。」趙飛燕は前漢第十一代皇帝、成帝の寵姫ちゆうき。班婕妤はんしやうよを押しつけて、遂には皇后の地位に上のぼった女性。成帝は結局この女性のために身を滅めぼすことになったので、後世からは必ずしも好意的に見られる女性ではなかった。唐代の詩には、趙飛燕を鴉たに喩たとえた作が幾つかある。鴉は時と場合によっては「嫌な女」を暗示する。高力士は、そこを衝いて楊貴妃の心中に李白への反感を生ぜしめようと企んだ。楊貴妃は、うかうかと其の手に乗ってしまう。当然ながら恨みは直ちに玄

あるとき、楊貴妃が、重ねて清平調詞を歌っている、高力士がからかうように「お后様はその歌の作者が、お后様を侮辱したことを恕ゆるんでいらっしゃるとばかり思っていましたのに、なぜその様に繰り返してお歌いになるのですか。」と言った。楊貴妃は驚いて「李白はどうして私を侮辱したことになるのですか。」

宗の耳に入る。李白は、宮廷詩人の地位を剥奪はくだつされただけでなく、追放処分が加わって、都での生活は終りを告げる。あつけない二年未満の長安滞在だった。もともと玄宗皇帝は楊貴妃からの訴えをそのまま受け入れたのではないらしい。皇帝としては李白を宮廷に引き止めておきたかった様子の話が伝わっている。が、廷臣たちの反対が強くて、皇帝はやむなく追放処分にしたのだという。そんな話が伝わっているというこの背後には李白の奔放な批判の目を煙たがる連中が宮廷内に多かつたのではないかということが考えられる。大唐の宮廷も李白という天才を容ゆるれるには小さ過ぎた。

故郷に帰らなかった永遠の旅人

その後しばらく各地を転々とする間、安祿山の乱が起きる。乱を避けて玄宗皇帝は蜀へと避難するが、その途次、官軍兵士の要求を退け難く、楊貴妃に死を賜うことになったのは周知のこと。その報を耳にして、李白はどういう思いを心に抱いたことであろうか。乱、終結の直後、止むを得ない事情もあって、息子たちの帝位争いに巻き込まれ、一時は逆賊の立場に身を置くことになったために、危うく処刑されそうになる。かつて安陸にいた頃、罪をかばってやった人物がこのとき官軍の將軍に出世していた。この將軍の尽力によって、かろうじて死罪は許され、夜郎（今

の貴州省、当時は随分な僻地（るどい）に流罪となる。流罪もまもなく許されはするが、結果として其の後は、各地を半ば流浪する波乱に満ちた余生を送ることになった。「水底の月を掬（すく）おうとして溺死する」まで、あと五、六年という頃の話。

